【れいほく田舎暮らしネットワークメンバーの発表】

Ａさん：　副会長のＡです。私は嶺北移住者の会の会長もやっておりまして、これは移住者同士の交流を目的とした任意団体なんですが、パンフレットやチラシを作成して、各町村、転入届の窓口等で配布させてもらっています。各町村に行ったらありますので、よかったら一度ご覧になってください。

Ｂさん：　私の移住の動機ですが、私は大阪出身で京都に住んでいたのですが、夫の実家が土佐町でして、そこが自然いっぱいのところで、休みの度に通っていて、いつかそこに住みたいなと思っていました。子供ができた時、思い切って移住をしてみようと夫婦で決めました。

移住した際の障害についてですが、うちの場合は家の問題はありませんでしたが、就きたいと思える仕事がありませんでした。どうせ移住をするなら、自分たちの経験を生かしてできることをということで、地域でとれる食材もとてもいいものだったので、それらを使ってできる仕事をということで、今の「ぽっちり堂」というお菓子屋を始めました。

その中で助かったのは、まずインターネットで始めようと思ったので、ネット環境が整っていたことです。もしインターネットがなかったら、私はずっとここでは暮らしていけないのではないかと、いろいろな意味で思いました。

その次に障害といえば障害だったのは、私は、田舎が好きといっても大阪出身で、街の中で育った人間なので、田舎での人付き合いであったり、文化、そういうものに理解ができない部分がすごくありました。それを、夫がいたから通訳してくれて、３年とか４年かけてやっと理解してきたという感じです。助かったのは、うちは夫の家族がここにいたので、その人達の信頼関係を継がせてもらったところがあって、町の人にもすごく親しんでもらっているなと思っています。

これは自分自身の障害ではないですけれど、いろいろな人が、つてをたどって私達のところに空き家のことや移住のことで相談に来られます。やはり、行政にも行ったりするんですが、空き家というのは行政の人が貸してくださいといって貸してくれるようなものでないところもありますので、空き家の大家さんと私達が普段からお付き合いをして、信頼関係ができているような場合には、あらかじめ大家さんに紹介してもいいかどうかを確認しておいて、おつなぎしています。その場合、私達も大家さんとの信頼関係がありますので、それを壊すようなことはできませんので、この人にだったら、と思う人に紹介しています。

ひとつ思うのは、移住者というのは、あまりすぐに結果がでるものではないということを感じており、すぐ来て、空き家をあっ旋して住むというのではなく、５年とか１０年とかずっと付きあっていく中で、移住を考えている人達も具体的に住むというイメージができるなど、あまり結果を望まない、望みすぎないで紹

介できることはするというぐらいでやっています。

その中で思うのは、移住コンシェルジュをやっているというのはすごくいいと思うんです。どうしても行政だけの窓口だと厳しいところはあると思うので、担当の方のモチベーションとか、移住に関する理解力とか、どれだけ応援したいと思っているかとかにも左右されるので、本当に移住を歓迎して、できたらいいなと思っている団体があるならば、そういうところにできるだけ協力を求めたほうが、実際のところは役立つかなと思うこともあります。

住んでみてのマイナス面としては、田舎暮らしと言っても京都でするのと高知でするのとでは全く違うと思いました。ここでは、都会にたまに行きたいなというときにぱっと行けるわけではなく、それが私にとっては結構苦痛な時もあります。それでも、高速バスとか飛行機とかもなんとかあって、助かっているので、それだけはなくして欲しくないと希望します。

プラス面として、良かったと思うのは、子供を本当に伸び伸び育てられるところです。家族が本当に協力してくれたり、地域の方も子供が少ないだけにすごく温かく見守ってくれます。それと、スーパーとか病院とか公共機関というのがすごく身近に集まっていて便利だと思います。

田舎ですけれど、すごく住みやすい場所だなと思っています。以上です。

Ｃさん：　私は、今から４年前に東京から夫婦で本山町に移住してまいりました。私も妻も関東出身なので完全にＩターンです。

移住するにあたって感じた問題点ですが、一番困ったのは家と仕事に関する情報の少なさです。不動産屋に頼もうと思っても嶺北に不動産屋は一軒もありません。しょうがないから役場に尋ねたら、空き家はほとんどないというふうに言われます。ところが、実際に嶺北に住んでみて、地元の方々と話すうちに空き家は数多くあるということが分かってきました。空き家はあるのだけれども、その情報が移住しようとしている人には届かない。

また、嶺北には不動産屋がありませんので、役場としても情報の提供を行うだけで、あとはお二人でどうぞとなります。そうなってしまうと、借り手も貸し手も不慣れなものでとても困ってしまいます。特に、貸す側ですね。地元の人達は、そんなことは初めてなので、直接契約をやってくれと言われても、尻込みしてしまう人が多いというのは当然のことだと思います。空き家はあるけれども、実際に貸してもいいよという情報が出てこないというのは、間に信頼がおける組織なり人がいないというのが大きな問題ではないのかと思います。

仕事についても同様です。無いわけではないんですが、求人情報は町内で回っているだけで、町外には出ることがない。これも、家の情報と同じく、責任を持って求人情報の仲介をやってくれる団体があれば、かなり情報も集まってくると

思います。

Ⅰターン移住者が最も欲しているものは、家と仕事に関する情報ですので、これらの情報提供と、そして、情報提供だけでなく、実際の仲介ですね、不動産仲介だとかちゃんと責任を持って仕事の紹介をしますという組織の立ち上げがあれば、かなり大きなⅠターン移住者への助けになるんじゃないかと思います。

次に、私が嶺北に４年間住んで感じる嶺北の将来像について。嶺北という土地は、田舎暮らし希望者にとって決してメジャーな土地ではないと思います。都会へのアクセスを求める人や逆に広大な大自然を求める人、農業をやりたい人、そのような人がⅠターン希望者の大半なのでしょうけれども、そういう人が嶺北という土地を積極的に選ぶ理由はありません。考えてみると、嶺北というのは、本当に紹介するのに困るというか中途半端な「古き良き日本の田舎」という言い方しかできない土地だと思います。

ただ、そのような土地に魅力を感じる人というのも少数ですがいると思います。嶺北という土地は、特に何があるというのではなく、棚田や小川に囲まれたごく普通の里山風景というのが一番の魅力であると思います。

そのような土地である嶺北の将来を考える時に、嶺北の魅力を引き立たせるためには、徹底的に田舎であろうとすることだと思います。川が美しく、山が美しく、棚田風景が美しいといった今ある嶺北の魅力をもっと引き立たせる方向こそが大切だと思います。

嶺北は、他の土地から比べれば、日本の中ではかなり自然の残っているほうだと思いますが、数十年前と比べたら見る影もないほど貧相になってしまったといいます。その原因がどこにあるかというと、これは、スギやヒノキといった人工林の行き過ぎた植林にあるのではないかと感じています。嶺北の山の８割近くをスギとヒノキにし、しかもそれが林業として採算が取れず荒れ果てたままになっているということは、農業、漁業、観光といった多岐に渡る分野に多くの被害を与えているのではないかと思います。この山を広葉樹林に戻すために、何とか山の地主さんへと利益還元できるシステムを作ることが必要じゃないかと思います。いろいろなところの利益の一部でも何とかこの嶺北の水源地である山の地主さんのところに還元できるシステムがあれば、例えば、今後の環境問題におけるトップランナーとしても嶺北が注目を集めるのではないかと感じます。

Ｄさん：　何を話そうかと思ったのですが、私の１２年間の試行錯誤が何か皆さんのヒントになればということでお話してみようかと思います。

私は、福岡に住んでいた時には、不登校の子供とか中退の子とかいろいろな大人とか、何かたまれるような場所をやっていまして、最終的には結構広いところを借りてやっていたんですけれど、それでも行き場がなくて、もう家があふれて

いるみたいな感じになってきていました。家がパンクしそうでしたので、山の中で農的な暮らしなんかも取り入れながらやれたらいいなと思っていた時に、ちょうどご縁があってこちらに越してきました。

最初は村営住宅を借りて、木星会というところで働いて、山暮らしを経験しながら少しずつ何かできていったらいいなと思っていましたが、いろんな人達がこれるようなところができたらいいなと考えて、ずっと家探しをしていました。

農的な暮らしもしたいと思っていたところに、ちょうど、ここに座られているＨさんから自然農法をしている田んぼがあるから貸してくださるということになって、やっていたんですけれど、通いながらだととても田んぼは無理だということが、身にしみてわかりました。それで、大川村の中でどこかないかと探したところ、広い棚田が５段放棄されている場所を見つけて、そこを貸してもらえることになりました。近くに住まないと、水の管理なんかができないと思い、古い家を見つけたのですが、そこを貸していただくにあたっても、本当に苦労をしました。

部落長さんに相談をしたりするうちに、キーパーソンは、大阪に住んでいる８０過ぎのお爺さんだということが分かったのですが、そのお爺さんが香川県の娘さんのところに来られた時に、直接会いに行ったりして、何度か話をして、やっとそれなら貸そうかということになりました。

家探しに関しては、先ほどから言われているように、本当に個人的な人のつながりがあって信頼関係を得ないと難しいということは感じています。私達は、もともと両方とも親が大川村に住んでいるわけではないので、もともとの地盤も何もなくて、本当に信頼関係をつくっていくのには地道な努力が必要だなということを感じさせられました。

もうひとつ、子供が不登校になったんですが、親子共々しんどい思いをしていた時に、県の心の教育センターの方などにすごく助けていただいて、外からぽんと入ってきた者にとって、いろいろなところとつながりを持って支えていただけるということが有難いなと感じました。

それと、大川村は今、小中一貫校で何とか保っているんですけれども、全部統合して小学生から宿舎に入れたり、バスで通わせて、もっと皆まとめて教育したほうがいいのではというアンケートが来たことがあったんですが、過疎の村に子供の声がしなくなったり、学校の行事がなくなったりしたら、本当に寂れていくと思うので、是非、そういうことにならないよう、お金はかかると思いますが、自然の中で山の現実を身にしみて感じている子供を育てるということも考えていただけたらと思います。

とにかく、私はこういうところにいろいろな意味で行き詰ったりした人たちが和やかに過ごせる場所がいつかできたらいいなと思いながらぼちぼちと暮らして

おります。

【前半３名の方と知事との意見交換】

知事：　家を探すにしても、仕事を探すにしても、行政だけの窓口では難しいので、地元のネットワークに協力を求めたほうがいいのではないかということが、３名の皆さんのお話をうかがって、本当にそうだなと思いました。

やはり、ネットワークの皆さんと行政が協働をさせていただくという仕組みづくりを県内にどれだけ張り巡らせていけるかというのは、ひとつのキーであると思います。

もうひとつ、Ｂさんのお話の中で、５年とか１０年という長期スパンでみたほうがいいのではということでしたが、私もなるほどなと思いました。付き合いを段々と深めていく中でお互いをよく知り合って、信頼できる人に家を紹介していくとか、そういうことが必要なんじゃないかというお話だったんですけど、やはりそこは実践しておられるんですか。窓口として重要なポイントだと思ったのですが。

Ｂさん：　こちらに移住して来てからすぐにそういうことはやっていて、田植えをしたりとか、何か田舎のイベントがある時に呼んで一緒にしたりとかはずっとやっています。それを通じて来てくれる回数が多い方がいろいろな話もできるし、しんどいことも含めていろいろなことがわかるので、そのうえで決められるのですごく良いと思います。

知事：　とりあえず試すというのもひとつの手なのかもしれません。すごく勉強になって、もうちょっとそこの仕組みを工夫できたらと思いました。

ちなみに、都会とのアクセスは、やはりキープできた方がいいですか。

Ｂさん：　そうですね。やはり自分が街の人間なので、自然は大好きですけれど、ここの人もすごく好きですけれど、いろんな文化背景が人にはありますので、そういう部分では、そっちも必要な時があると思います。いろいろなバランスの人がいると思うので、都会とのアクセスはあったほうがいろいろな人が住み続けやすいと思います。

知事：　いろいろな方のニーズに対応できますよね。さっき、Ｃさんも仰いましたけど、都会にすぐアクセスできる田舎は都会の周りにたくさんあるので、そういう中でこの高知県にあえて来てもらうためにはどうするかというお話だと思うのですが、もちろんアクセスできるようにしておくことは重要だと思いますが、あえて嶺北だったり高知県だったりするのはなぜなのかというところをよくよく見極めていかないといけ

ないと、お話を伺いながら思いました。まさにＣさんが仰ったように、都会の真似をしても駄目なので、田舎としての良さをいかに伸ばしていくか、それが強みを伸ばすということになるのだろうと思います。

Ｃさんがおっしゃったことで、なるほどと思ったことがふたつあります。まず最初に、家と仕事の情報について責任を持って仲介する組織が必要であり、かつその情報は、紙媒体よりインターネットのサイトでできるだけ明らかにしていくべきだということですが、これについては全く私も賛成です。実際、移住の相談をしていただく中でも圧倒的に多いのがネットでアクセスしてもらう件数です。県としても、移住希望者の方は最初にネットで探されるから、ホームページにアクセスしてもらって、次に移住コンシェルジュにいろいろ話をしていただいて、そうして、家にしても仕事にしても出来るだけ責任を持って仲介をする組織体制を目指して、今、作りこみをしているところなのですが、Ｃさんのおっしゃったのは、ネットのうえで信頼感がもっと見えるようにすべきで、電話して相談したりする前に、ネットだけ見て、安心感が得られないとその次に進めないと、そういうことでしょうか。

Ｃさん：　インターネットで情報を出す場合に一番重要なのは情報量だと思います。情報を多く出すためにどうすればいいかというと、そのために信頼ある、ちゃんと仲介ができる団体をつくるべきであって。嶺北に関して言えば、ネット上で見れる情報の数をもっと充実させていただきたいと思います。

知事：　例えば、個別の家の情報まで出せないにしても、ここのあたり周辺に何件の空き家があるというだけでも出しておけばアクセスしようかなという気になるということでしょうか。

Ｃさん：　そうですね。具体的な情報じゃなくても、間取りと外観だけといった具合でもあればかなり助かると思います。

知事：　仕事についても、仕事情報をできるだけ一元的に集約しようとして、「高知仕事ネット」というのを今、ネットで作っています。できるだけいろいろな情報を集約しようとしていますが、それが移住の窓口とリンクしているかというと必ずしもそうはなっていないと思います。

移住コンシェルジュに相談していただいたら、仕事のことについては雇用労働政策課というところにつないで、そこからいろいろご相談に応じるというシステムにはなっているのですが、最初にネットである程度わかるようにしておかないと、移住コンシェルジュに相談しようという動機にはつながらないのではと、そういうことですね。

Ｃさん：　そうですね。全部は出せなくても情報は多く出したほうがいいと思います。

知事：　非常に実践的な良いアドバイスをいただきました。ありがとうございます。

嶺北の将来像についてですが、田舎としての良さといいますか、自然あふれるところの良さを伸ばしていくということは、私も大賛成です。さっきの人工林の話ですが、伐採した後とか、その後にそのまま手を加えないで広葉樹に戻していこうかという地域もあるのはあるんです。ただし、Ｃさんがおっしゃったように、広葉樹にした時に、山主に何か利益が還元されるのかと言われると、確かに今の状態では無いかもしれません。もう林業を諦めたので、もうそのまま自然林に残していこう、変えていこう、広葉樹にしていこうというのが現実のところだと思います。

林業としての業をしっかり成り立たせていって山を豊かにするという意味においては、まず第一に間伐をしっかりやっていくということが一番の王道だと思います。ただ、山の多様な使い方として広葉樹に戻していくことによって経済的利益も還元する仕組みづくりというのは、確かに考えてみてもいいのかもしれません。具体的なアイデアはありますか。

Ｃさん：　広葉樹に戻すことで、これをどこが利益を得るかというのを科学的に分析するのは難しいと思います。具体的にどうすればいいのかというのはわからないんですけど、何とか県の枠を越えたところで、下流から上流へ利益を還元できるシステムが何かできればいいなと思います。